

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 11 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770128

研究課題名(和文) 東アジアにおける蘇軾文集の成立と伝承に関する研究

研究課題名(英文) A study of the perfection and the spread of the collected works of Su Shi in the East Asia

研究代表者

原田 愛 (HARADA, Ai)

金沢大学・学校教育系・准教授

研究者番号：50638294

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究によって、蘇軾の生きた北宋中期から南宋、金、元までの蘇軾の文集編纂の過程と成果を系統的、かつ総括的に明らかにした。同時に遼や西夏、金など外国への伝播や、日本の松尾芭蕉等への文学的影響についても論及し、詩だけでなく、詞(詩から派生した歌辞、宋代に流行した)や和陶詩(陶淵明の詩124首に和韻したもの)など様々な蘇軾の文学とそれを刊刻した文集が時代や地域を越えて影響したこと、それぞれの文集の様態と歴史的背景や文学受容の在り方を解明できた。その成果となる論文を投稿して多くは掲載を許され、それを基礎に拙著『蘇軾文学の継承と蘇氏一族 和陶詩を中心に』(2015年2月)を上梓した。

研究成果の概要(英文)：This research systematically and comprehensively clarified the process and outcome of compilation of Su Shi's collected works from the middle of Northern Song Dynasty to South Song Dynasty, Jin Dynasty and Yuan Dynasty. Furthermore, I also discussed literature influences on the transmission of foreign countries such as Liao, XiXia and Jin, and to Matsuo Basho etc in Japan. I have elucidated the influence of various Su Shi's literature, such as Shi(poetry), Tsu (Lyrics derived from poetry, popular in Song Dynasty) and He Tao Shi (harmonized to Poetry 124 of Tao Yuanming), and the books that wrote it over the times and regions, the manner of each article collection, the historical background and the acceptance of literature. Ultimately, I wrote the results in a paper and posted, and much of the paper was allowed to be posted. I published my book based on those papers, the title is "Inheritance of Su Shi's literature and the Su clan; Focusing on He Tao Shi" (February 2015).

研究分野：中国文学

キーワード：中国文学 蘇軾 編纂 出版

1. 研究開始当初の背景

中国の悠久なる文学の歴史に於いて、「宋」は、文学・哲学・史学の人文三分野それぞれにおいて集大成が為された時代であり、印刷技術の発展・普及に伴い、それらの成果が伝播してゆく形態、範囲、速度に甚大なる変化が生じた時代でもある。そして、日本の文豪である幸田露伴をして「大才」と言わしめた蘇軾(号・東坡居士、1037-1101)は、広範かつ恒久的な影響力を有する宋代を代表する文人である。その蘇軾の文集は、生前にほぼ出版されていた『東坡七集』を基礎とするが、実は蘇軾は哲宗朝元祐年間(1086-1093)に政権を執った党派(所謂「旧法党」のこと、後に「元祐党」と称される)の有力者で、晩年に政争に敗れたことから、中国最南端の海南島にまで流謫され、これらの文集のうち文学作品を収めた『東坡集』『東坡後集』は発禁対象となっていた。こうした状況は蘇軾の歿後も続いたが、それが好転したのは南宋孝宗朝に至ってであり、その間、元祐党への報復政策である「元祐党禁」が広く行われたため、蘇軾の詩文は所有すら禁止されていたのである。

このような晩年から歿後の出版事情及び南宋初期の蘇軾文学受容の実態については、内山精也氏が「『東坡烏臺詩案』流傳考 南宋初の士大夫における蘇軾文藝作品蒐集熱をめぐって」(『横浜市立大学論叢』人文科学系列 47-3、1996年3月)にて論じた。但し、当時の先行研究は、現存する蘇軾の詩文集について、それぞれの時代の出版事情(出版された年代・場所、版元や出版物の内容等)を明らかにすることを主題とする。しかし、蘇軾の文集は、同時代の司馬光や王安石、蘇轍などと比較した場合、南宋及び金・元・明・清と各時代で別集・全集・注釈書がより陸續と刊行されており、それらの系譜の整理及び分析は未だ十分ではなかった。

2. 研究の目的

申請者は、これまでに蘇軾生前の文集編纂の状況とそれを支えた一族の編纂活動についての研究、また、蘇軾晩年の代表作「和陶詩」に関する研究を同時に行ってきた。特に、前者の蘇軾を生涯支えた蘇轍や歿後の継承を請け負った末子の蘇過、そして、蘇軾の文集を後世に伝えた曾孫の蘇嶠・蘇峴兄弟については、申請者の考察を嚆矢とする。更にその研究を進め、かつ、前記の問題を解決するために、以下のように、研究を分けて進めようと考えた。

- (1)南宋・金及び元の蘇軾文集の編纂と受容
- (2)明・清の蘇軾文集の編纂と受容
- (3)日本や朝鮮など東アジアにおける蘇軾文集の編纂と受容

これにより、蘇軾文学研究のみならず、これまで関連性の薄かった宗族史研究・出版史研究・比較文学研究といった各研究分野を有機的に結びつけ、新たな視点と進展を加え、かつ、東アジア全体の文化伝播の実態調査にもなり、また、日本文学における中国文献の学術受容と発展においても、独自の成果を得ることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究の目的達成のために、研究を進めたが、日本・中国の学界で新たな論著が発表されたこと、文学形態によって文集編纂の過程に大きな差異があると判明したことなどにより、研究当初の計画とやや進め方を変え、以下のように研究を進めた。

- (1)南宋の蘇軾文集の編纂と受容(2014年度～2015年度)

蘇軾の生前の編纂については、拙稿「蘇集編纂考」(『中国文学論集』第42集、2013年12月)において既に論じていたので、それを

踏まえて本研究の基盤となる元祐党禁後の蘇軾文集の形成及び受容の過程を明らかにするため、南宋における蘇軾文集の編纂と受容を考察した。その際、蘇軾文集そのものも一部を除き、散佚しているため、同時代の資料を分析しつつ、調査を行った。

同時に、元祐党禁後の禁書や詩禍についても調査を行い、南宋朝に起こった「江湖詩禍」について分析した。また、南宋における蘇集編纂においての重要な目撃者といえる洪邁、蘇門の筆頭格である黄庭堅など編纂過程において重要な証言者となる文人についても同時に調査を進めた。

(2) 宋および金・元の蘇軾の詞集編纂と受容 (2015年度～2016年度)

金・元において、詩文の編纂を調査したところ、新たに報告すべき事柄がなかった。しかし、金の元好問は蘇軾の詞(詩から派生した歌辞)の選集を編纂し、また、元には『東坡楽府』という蘇軾の詞の全集としては後世に定本とされるものが編纂された。そこに至るには、詩文編纂とは異なる要素があり、それを文学資料から史書に至るまで記載された記事を検証した。現存する明・清の蘇集の来歴を論じる研究は既に中国の先達によって行われていたが、明・清に至る南宋・金・元における個々の編纂過程の詳細な研究が不十分であったことから、それを集中的に調査し、それによって「明・清における蘇集編纂と受容」研究の補強とすることとした。

(3) 宋および金・元の蘇軾『和陶詩集』編纂と受容 (2014年度～2016年度)

蘇軾の文学作品の中でも特異な作品群である「和陶詩(六朝晋の隠逸詩人陶淵明の詩124篇に和韻した詩)」の文集編纂について調査した。嶺南に流された蘇軾の晩年に創作が本格的に始まり、後に意図して他の詩文とは独立した形で文集にした。調査においては、

弟の蘇轍、いとこの程之才などの協力を経て文集編纂が行われたその過程を辿り、かつ、南宋から元にかけて行われた「和陶詩」を掲載した文集、そして、注釈本の計7本の編纂と流伝について系統的に明らかにせんとした。また、近年、「和陶詩」の注釈本の残巻が発見されたことで、中国の学界で多くの論攷が発表されているため、2016年3月24日～4月4日に中国の南京大学と上海の復旦大学において調査旅行も行った。

(4) 東アジアにおける蘇軾文集の編纂と受容 (2014年度～2016年度)

蘇軾の詩文が日本文学に与えた影響についても調べつつ、それを国語科教材とする道を模索した。主に、松尾芭蕉、中島敦、谷崎潤一郎や、(1)～(3)までに調査した蘇軾文集の刊本の流伝および文学受容などについても調査した。これについては、調査を終えることが出来なかったが、松尾芭蕉と中島敦については、俳句および漢詩を調べ、明らかな影響が見られた。

4. 研究成果

本研究を進めた成果は以下のようなものである。

(1) 南宋の蘇軾文集の編纂と受容 (2014年度～2015年度)

蘇軾の亡くなった北宋末から南宋までに行われた蘇軾の文集編纂の様相については、系統立てて「南宋蘇集編纂考」と題する論文として発表した(『中国文学論集』第43集、2014年12月)。また、南宋朝に起こった「江湖詩禍」について寄稿し、掲載された(『アジア遊学』180、2015年3月)。また、洪邁については「洪邁の蘇集編纂への視線」(『アジア遊学』181、2015年4月)にて論じた。

(2) 宋および金・元の蘇軾の詞集編纂と受容

(2015年度～2016年度)

宋・金・元の蘇軾の詞集編纂については「蘇詞集編纂考」(『中国文学論集(岡村繁先生追悼号)』第44集、2015年12月)にて論じた。また、「蘇詞集編纂のはじまりと変遷」(第286回中国文芸座談会、九州大学、2016年1月30日)で報告した後、修正を行い、中国語に翻訳して「蘇詞集編纂考」として『新宋學』第6輯(2017年9月刊行予定、復旦大学出版社)に投稿し、掲載が許された。

(3)宋および金・元の蘇軾『和陶詩集』編纂と受容(2014年度～2016年度)

南宋における流伝について、第1回日本宋代文学学会(2014年5月31日)において「蘇軾『和陶詩集』流伝考」として報告し、また、黄庭堅の役割について「蘇軾『和陶詩』与黄庭堅」を中国杭州の浙江大学主催の中国宋代文学学会第九届年会(2015年9月24日～27日)にて報告した。更に、元代まで調査を加えて、「蘇軾『和陶詩集』編纂考」として『日本宋代文学学会報』第3集(2017年5月刊行予定)に投稿し、掲載が許された。

(4)東アジアにおける蘇軾文集の編纂と受容(2014年度～2016年度)

松尾芭蕉と中島敦における蘇軾詩の影響について、国語教材としての観点で論じた共著論文「国語科古典学習の指導と研究」(『研究紀要』第36巻、志學館大学人間関係学部、2015年1月)中の「(漢文)蘇軾「飲湖上、初晴後雨」と見立ての文学の継承」として発表した。

また、以上の研究成果を取り入れて著書『蘇軾文学の継承と蘇氏一族 和陶詩を中心に』(中国書店、2015年2月)を上梓した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文](計 7件)

原田 愛「蘇詞集編纂考」、『新宋學』第6輯、中国上海市復旦大学出版社、査読有り、2017年9月刊行予定

原田 愛「蘇軾『和陶詩集』編纂考」、『日本宋代文学学会報』第3集、査読有り、2017年5月刊行予定

原田 愛「蘇詞集編纂考」、『中国文学論集(岡村繁先生追悼号)』第44集、査読有り、2015年12月、pp98-114

原田 愛「洪邁の蘇集編纂への視線」、『アジア遊学 南宋の隠れたベストセラー『夷堅志』の世界』181、査読無し、2015年4月、pp162-169

原田 愛「江湖詩禍」、『アジア遊学 南宋江湖の詩人たち 中国近世文学の夜明け』180、査読無し、2015年3月、pp127-132

河原 修一・山崎 桂子・原田 愛「国語科古典学習の指導と研究」、『研究紀要』第36巻、志學館大学人間関係学部、査読無し、2015年1月、pp105-128

原田 愛「南宋蘇集編纂考」、『中国文学論集』第43集、査読有り、2014年12月、pp145-154

[学会発表](計 3件)

原田 愛「蘇詞集編纂のはじまりと変遷」、第286回中国文芸座談会、2016年1月30日、九州大学(福岡県福岡市)

原田 愛「蘇軾『和陶詩』与黄庭堅」、中国宋代文学学会第九届年会、2015年9月24日～27日、浙江大学(中国浙江省杭州市)

原田 愛「蘇軾『和陶詩集』流伝考」、第1回日本宋代文学学会、2014年5月31日、京都大学(京都府京都市)

[図書](計 1件)

原田 愛、中国書店、『蘇軾文学の継承と蘇

氏一族 和陶詩を中心に』、2015 年 2 月、計
282 頁

6 . 研究組織

(1)研究代表者

原田 愛 (HARADA, Ai)

金沢大学・学校教育系・准教授

研究者番号：50638294